

看護学生がもつ老年者観の形成要因；

学生の生活背景との関連について

鳥取大学医学部保健学科 成人・老人看護学講座

前 田 恵 利

The development of nursing students' perceptions of the elderly: its relationship with students' background characteristics

Eri MAEDA

*Department of Adult and Elderly Nursing School of Health Sciences, Faculty of Medicine,
Tottori University, Yonago 683-8503, Japan*

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the relationship between nursing students' perceptions of the elderly and the students' background characteristics by using the "perceptions of the elderly" scale. The study was conducted by surveying 240 third year students from 3-year nursing courses in Tokyo. The results of the multiple regression analysis indicated that the students' perceptions of the elderly as being "stubborn and weak" were related to two factors: the students' experiences of living with their grandparents; and the level of care they received from their grandparents. Furthermore, the age of the students and their experience in volunteer work with the elderly had a positive impact on their perception that the elderly "have good social interaction."
(Accepted on October 19, 2007)

Key words : Perceptions of the elderly, nursing students, background characteristics, grandparents, volunteer experience

はじめに

老年者と直接かかわる職業の人が老年者に対しどのようなイメージをもって関わっているかを明確にすることは重要であり、将来、老年者を看護する看護学生には、老年者に対する見方、イメージに偏見がないことが求められる。

古谷野¹⁾は「老人に対する保健・医療・福祉サービスにおいて、サービス提供者の老人観はサー

ビスの質に重大な影響を与え、肯定的な老人観はサービスの質の向上、否定的な老人観は質の低下をもたらす」と述べている。従って看護学生の老年者観とその形成要因を探ることは、サービスの質の向上のために重要である。

老年者のイメージやとらえ方についての研究は、我が国では1970年代から行われ、主にSD法 (Semantic Differential) を用いて児童、中学生、大学生、中高年者を対象に調査されている²⁻⁵⁾。

これらより、若年者の老年者イメージの規定要因は、老年者との同居経験の有無というよりも老年者との交流内容が影響していて、「老年者と接触があるまたは多い」、「老人・老人問題への関心が高いこと」が、老年者への「優れた、有能、高尚、賢い」などの好意的イメージを高めていることがほぼ明らかになっている。

辻⁶⁾ 岩淵⁷⁾ などの結果もあわせ概観すると、老年者に対するイメージは児童低学年で肯定的であり、青年期にやや否定的に傾き、中高年に肯定的に傾き、女性は男性より肯定的と、性差、年齢、学歴差も指摘されている。

老年者観を測定する尺度としては、中谷⁸⁾ は「Tuckman-Lorge 老人観スケール (1953)」と「Kogan Attitude Toward Old People Scale (1961)」が欧米でよく用いられていると紹介している。本邦ではSD法を用いて老年者のイメージを測定している研究が多く、老年者観そのものを測定する尺度としては、日本人中学生に対して検証が試みられた馬場ら⁹⁾ が開発した「老人観スケール」が挙げられる。

看護学生を対象とした老年者観の研究では、海外ではKogan's Attitudes Toward Old People Scale (1961)¹⁰⁾ を用いて測定されたものが多く、看護師と看護学生の比較^{11,12)}、3年間の教育カリキュラム効果の調査¹³⁾ などがみられる。わが国では1990年代後半より看護学生を対象にした老年者イメージの研究がよく行われるようになり¹⁴⁻¹⁸⁾、1年次の健康老年者を対象にした実習により、老年者イメージが肯定的に変化し、学習及び臨地実習が進むにつれ身体的老化イメージが増大する傾向が指摘されている。

以上より、看護学生の老年者観は、幼児期からの身近な老年者とのかかわり、教育歴、年齢、知識、性差など学生自身の属性によって影響を受け、さらに授業や臨地実習（臨床・地域実習）での老年者とのかかわりにより変化することが推測される。しかし、国内の看護学生を対象とした老年者観の研究で、授業・臨地実習との関連は調査されているが、このような学生の属性が老年者観にどのように影響しているかを明らかにした研究は少ない。

本研究では、馬場ら⁹⁾ の「老人観スケール」を用いて、看護学生の老年者観を評価し、その形成要因として、特に生活背景などの学生の属性との

関連を明らかにすることを目的とする。

用語の定義

老年者観：本研究では老年者観を老人観と同義に用いている。古谷野¹⁾ は老人観を「老いもしくは老いた人に対して現代人が抱く意識や態度、イメージ」と定義している。また「老人観スケール」開発者のひとりである中谷⁸⁾ は老人観を、好きか嫌いかという「態度」的な意味を含ませて用い、「高齢者に対する主観的なとらえ方」と定義している。本研究では、老年者観を「老人観スケール」で測定することより、中谷の定義に準じ、老年者観を「老年者に対する主観的なとらえ方」と定義する。

対象および方法

1. 調査対象者及び調査方法

調査対象は東京都内の看護専門学校4校に在学する看護学校3年課程の3年生で、在学生305名中、調査協力の得られた240名（回収率78.6%）とした。調査期間は2004年11月30日から12月16日で、3年間の授業および臨地実習がすべて終了した時点であった。

調査方法は自記式質問紙を用いての各校ごとの一斉調査で、学生に質問紙をその場で記載してもらい回収した。

2. 研究の倫理的配慮

調査にあたって、対象校に文書で依頼し、当該校の倫理委員会の許可を得た。対象学生に対しては研究目的を説明し、協力の有無と内容がその後の学生の教員による評価・指導に影響しないこと、調査は無記名で回答はすべてコンピューターで処理し個人が特定されないこと、本調査は研究目的以外に使用しないことを文書および口頭で説明し協力を求めた。

3. 質問紙の構成

質問紙は、性別、出身地、年齢、看護学校入学前の学歴、職歴の有無、祖父母との同居経験の有無、同別居にかかわらず祖父母からよく世話を受けた経験の有無、老年者に対するボランティア経験の有無、「老人観スケール」で構成した。

老人観スケールとは、馬場ら⁹⁾ が老人観そのものを測定することを目的に開発したものであ

表1. 対象の背景要因の分布 (n = 240)

要 因	カテゴリー	人数	(%)
性別	男性	16	(6.7)
	女性	224	(93.3)
出身地	東京	126	(52.5)
	その他	114	(47.5)
看護学校入学前学歴	高校	184	(77.3)
	短大以上	54	(22.7)
看護学校入学前職歴	有り	54	(22.6)
	無し	185	(77.4)
祖父母との同居経験	有り	98	(41.0)
	無し	141	(59.0)
同別居にかかわらず祖父母からよく世話を受けた経験	有り	135	(56.5)
	無し	104	(43.5)
老年者に対するボランティア経験	有り	106	(44.4)
	無し	133	(55.6)
年齢 (歳)		23.6 ± 5.1 (20~43)	

る。項目は「Tuckman-Lorge Old People Questionnaire」の修正版68項目(1981)と、「Kogan Attitude Toward Old People Scale」(1961)の共通するカテゴリーおよび項目などを最大限取り入れたスケールであり25項目で構成されている。馬場らは「はい、いいえ」の2件法で測定し、中学生(男子543人, 女子453人)を対象に調査し検定している。この調査では、 α 係数は0.75, 併行法で行ったSD法(形容詞対のイメージ測定)との相関は $r = 0.531$ ($p < 0.01$)であった。本研究でも2件法を採用した。

4. 分析方法

データの統計解析には、統計ソフトSPSS ver13 for Windows及びAmos5を使用した。

調査項目のうち「老人観スケール」は、はい・いいえの2件法で測定し、「はい」を2点に「いいえ」を1点に置き換えた。逆転項目を含め、高得点が老人観の肯定的方向を示すよう変換した。

まず「老人観スケール」の下位尺度を作るために探索的因子分析を行い、その因子構造に基づくモデルの適合度を確認するために検証的因子分析を行った。

学生の属性と「老人観スケール」との関連をみるため、「老人観スケール」全体の合計得点と、因子分析した各因子3因子を下位尺度として、相関を見た。相関係数が有意なものを取りあげ、学

生の属性を独立変数にし、「老人観スケール」の各因子を従属変数として重回帰分析・強制投入法を用いて、学生の属性と老人観の因果関係をみた。

結 果

1. 対象の属性の分布

対象の属性の分布を表1に示した。性別は、男性16名(6.7%)女性224名(93.3%)、出身は都内126名(52.5%)、近県その他114名(47.5%)であった。年齢は20歳から43歳まで平均23.5歳であった。看護学校入学前の学歴は高校卒業生184名(77.3%)、短大以上の学歴を持つもの54名(22.7%)であり、入学前に職歴を有するものは54名(22.6%)、有しないもの185名(77.4%)であった。祖父母との同居経験がある者98名(41.0%)、無い者141名(59.0%)であり、同別居にかかわらず祖父母からよく世話を受けた経験のある者135名(56.5%)、無い者104名(43.5%)、老年者に対するボランティア経験のある者106名(44.4%)、無い者133名(55.6%)であった。

2. 老人観スケールの回答結果と因子分析結果

1) 老人観スケールの回答分布を表2に示した。各項目の得点を肯定的老人観の方向に変換し合計得点を求めた。25項目全体50点満点の平均点は41.81点、最小値26、最大値49、標準偏差3.56、

表2. 老人観スケール「はい」の回答分布 (n = 231) 数値は%

# 1	もう一度若くなりたいと願っている	54.8
# 2	自分のやり方を変えない	72.1
# 3	もうすぐ死ぬことを心配している	33.8
# 4	異性には興味を持っていない	9.2
# 5	不幸だと思っている	4.2
# 6	忘れっぽい	79.2
# 7	息子や孫の迷惑になっている	8.3
# 8	ひとりぼっちだ	18.8
# 9	食べ物のことでよく文句を言う	23.8
# 10	自分の将来に希望がないと考えている	22.1
# 11	いつも疲れを感じている	30.8
# 12	お友達がたくさんいる	58.6 *
# 13	死ぬことを何よりもこわがっている	5.8
# 14	お金が足りないことを心配している	22.9
# 15	まわりの人を困らせることが多い	15.1
# 16	孫を甘やかしている	63.8
# 17	自分の健康について心配している	81.3
# 18	自分自身をみじめだと思っている	13.3
# 19	政治や社会の出来事に関心が強い	51.3 *
# 20	病気で寝ていることが多い	22.5
# 21	まわりの人から尊敬されている	62.1 *
# 22	意見や忠告をしたがる	57.5
# 23	豊かな経験や知識をもっている	95.8 *
# 24	頭がぼける	42.3
# 25	髪や服装に気をつかわず、だらしない	6.3

*は肯定的老人観をそれ以外は否定的老人観をさす回答

歪度-0.96, 尖度1.34, α 係数は0.703であった。
2) まず老人観スケールの探索的因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った。

因子分析を行う前に、「はい」「いいえ」いずれかに5%以下の分布を示す項目を極端な得点分布を示す項目として「#5不幸だと思っている」「#23豊かな経験や知識をもっている」の2項目を削除した。因子負荷量0.30以上を採用し、3因子が得られた。累積寄与率は30.39%であった。さらに因子負荷量0.30以上の項目を選び再度探索的因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行い3因子抽出した。累積寄与率35.05%であった。

第1因子は「食べ物に文句をいう」「頭がぼける」「人を困らせる」「意見忠告が多い」など、老年者の頑固さとみる項目と、「疲れている」「病気で寝ている」等、虚弱な老年者の見方が含まれている10項目で「F1頑固・虚弱」と命名した。信

頼性係数 $\alpha = 0.691$ 。第2因子は「死ぬことを何よりもこわがっている」「お金が足りないことを心配している」「もうすぐ死ぬことを心配」「自分自身をみじめだと思っている」など将来への不安を表す4項目で構成され、「F2将来不安」と命名した。 $\alpha = 0.553$ 。第3因子は「お友達がたくさんいる」「政治や社会に関心が強い」「人から尊敬されている」など人間関係が良好で社会参加している老年者の見方が含まれる3項目で「F3社会関係」と命名した。 $\alpha = 0.355$ 。信頼性係数はいずれも低い値を示したが項目数が少ないことを考慮し以降の分析にかけた。

探索的因子分析結果に基づきモデルの適合度を確認するため検証的因子分析を行った。モデルを改良し適合度を上げるために表示された修正指数に基づき、観測変数に相関を仮定しても矛盾しない誤差変数間に共変動を加えて修正した。モデル

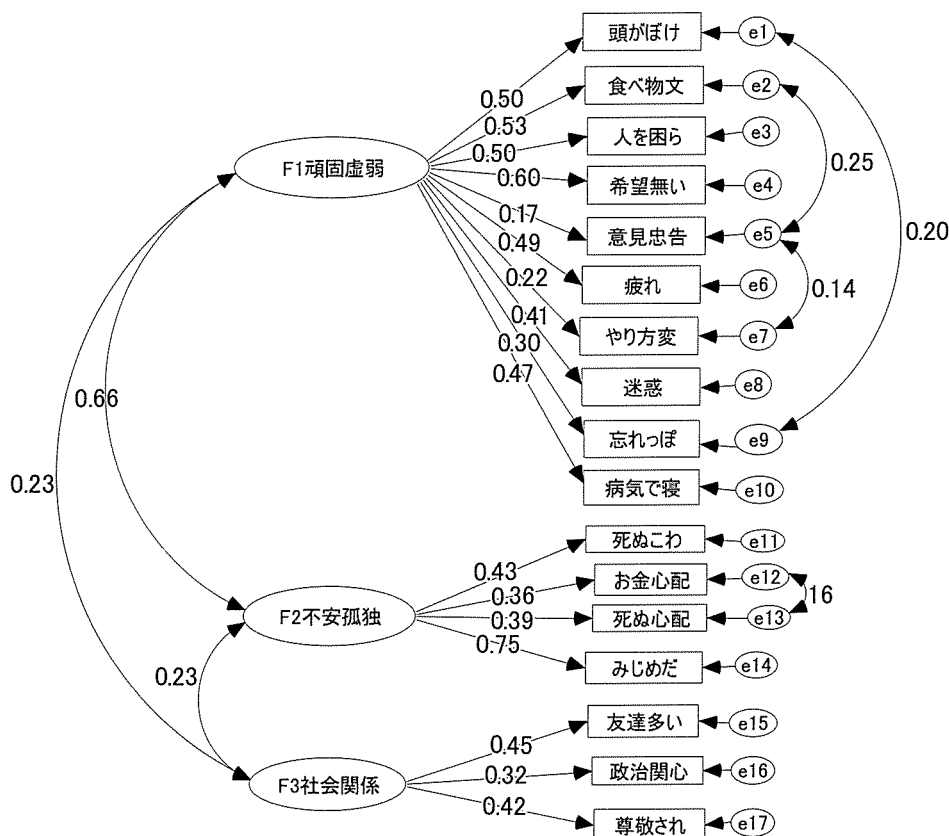


図1 老人観因子分析

↔ 値は2つの変数の共分散を表す

→ 値はパス係数(回帰係数)を表す

□内は上から「頭がぼける」「食べ物に文句を言う」「人を困らせる」「希望がない」「意見忠告をしたがる」「疲れを感じている」「やり方を変えない」「息子や孫の迷惑」「忘れっぽい」「病気で寝ている」「死ぬことをこわがっている」「お金が足りないことを心配している」「死ぬことを心配している」「みじめだと思っている」「友達が多い」「政治や社会に関心が強い」「尊敬されている」の略である。

モデルの適合度は $\chi^2 = 173.63$ ($p < 0.001$), $GFI = 0.922$, $AGFI = 0.893$, $RMSEA = 0.049$ であり、許容範囲と判断した。

は図1に示した。モデルの適合度は $\chi^2 = 173.63$ ($p < 0.001$), $GFI = 0.922$, $AGFI = 0.893$, $RMSEA = 0.049$ であった。 χ^2 値が有意であり $AGFI < 0.9$ であるが、 GFI が0.9より大きく $RMSEA$ が0.05より小さいことよりモデルは許容範囲と判断した。パス係数の有意性を示す検定統計量C.R.値は、「F3社会関係」から「#21まわりの人から尊敬されている」のパス係数は0.42で、 $C.R. = 1.939$ ($p = 0.052$)であるが、他のパスのC.R.値は1.96を超え有意であった。#21はC.R.値が1.96に満たないが、老人観を構成する項目として重要と判断しその後の分析に含めた。

3. 学生の生活背景と「老人観スケール」との相関

学生の背景と老人観との関連を見るため、背景及び老人観スケール合計得点と老人観3因子を下位尺度とした得点の相関を見た。結果を表3に示す。老人観スケール合計得点に有意な相関を示したのは、「同別居に関わらず祖父母からよく世話を受けた経験」であった ($p < 0.01$)。「老年者は頑固・虚弱」という老年者観に有意な相関を示したのは、「祖父母との同居経験の無いこと」($r = -0.128$)、「同別居にかかわらず祖父母からよく世話を受けた経験があること」($r = 0.154$)の2

表3. 学生の属性と老人観との相関

	年齢	入学前 学歴	入学前 職歴	祖父母との 同居経験	祖父母の世話 を受けた経験	ボランティア 経験
老人観合計	-0.047	-0.005	0.002	-0.091	0.173 **	0.112
F1頑固虚弱	0.030	0.069	0.058	-0.128 *	0.154 *	0.064
F2不安孤独	-0.008	-0.007	-0.031	-0.041	0.062	-0.006
F3社会関係	-0.196 **	-0.174 **	-0.157 *	0.029	0.105	0.172 **

** p < 0.01 * p < 0.05

表4. 老人観スケール第1因子「頑固虚弱」の重回帰分析

説明変数	相関係数	標準偏回帰係数	有意確率
祖父母との同居経験の有無	-0.128 *	-0.232	p < 0.01 **
祖父母から世話を受けた経験の有無	0.154 *	0.251	p < 0.001 ***

調整済みR² = 0.060, F = 8.552 (p < 0.001)
 * p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

表5. 老人観スケール第3因子「社会関係」の重回帰分析

説明変数	相関係数	標準偏回帰係数	有意確率
年齢	-0.196 **	-0.178	p < 0.05 *
ボランティア経験	0.172 **	0.144	p < 0.01 **

調整済みR² = 0.059, F = 7.178 (p < 0.01) * p < 0.05 ** p < 0.01

要因であった (p < 0.05)。「老年者は社会関係が良好」という老年者観に有意な相関を示したのは、「年齢が若いこと」「高卒で入学」「入学前職歴が無い」「老年者に対するボランティア経験を有すること」の4要因であった (p < 0.05)。

4. 学生の生活背景と老人観との因果関係

学生の生活背景と老人観との因果関係を推測できるかを見るため、相関係数が有意なものを取りあげ、学生の生活背景を独立変数にし、「老人観スケール」各因子を従属変数として重回帰分析・強制投入法を行った。重回帰分析結果を表4, 5に示す。

祖父母との「同居経験の有無」と、「同別居にかかわらず祖父母からよく世話を受けた経験の有無」を独立変数とし、「F1頑固・虚弱」を従属変数とした重回帰分析結果では、「祖父母との同居経験の有無」は標準偏回帰係数 $\beta = -0.232$ (p < 0.01), 「祖父母から世話を受けた経験の有無」は $\beta = 0.251$ (p < 0.001), 調整済みR² = 0.060, F = 8.552 (p < 0.001) でモデルは有意を示した。標準偏回帰係数 β がマイナス値となっているが、

これは、有りを2, 無しを1とし、「祖父母との同居経験の有無」と「F1頑固・虚弱」の相関が $r = -0.128$ とマイナス値を示したためである。即ち「祖父母との同居経験があること」, 「祖父母からよく世話を受けた経験の無いこと」が「老年者は頑固虚弱」であるという老年者観に影響し、「祖父母との同居経験が無いこと」, 同別居にかかわらず「祖父母からよく世話を受けた経験の有ること」が「老年者は頑固虚弱」でないという老年者観に影響した。

学生の「年齢」と「老年者へのボランティア経験の有無」を独立変数とし、「F3社会関係」を従属変数とした重回帰分析結果では、年齢の標準偏回帰係数 $\beta = -0.178$ (p < 0.01), ボランティア経験の有無は $\beta = 0.144$ (p < 0.05), 調整済みR² = 0.051, F = 7.178 (p < 0.01) でモデルは有意を示し、「年齢が若いこと」, 「老年者へのボランティア経験があること」が「老年者は社会関係が良好」という老年者観に影響するという結果を得た。

但し、いずれも重決定係数R²が低く弱い効果を示したので、傾向を示唆したと述べるに止めざ

るを得ない。

考 察

これまでの研究によると、老年者観を規定する要因として、性別、祖父母との接触経験、高齢者との過去の経験（量・質）、祖父母に対する親の価値観、学歴が明らかにされている。また祖父母との同居の有無は規定要因とならないとされている^{2-5,8,9)}。

本研究では、「祖父母との同居経験が有ること」、「よく世話を受けた経験の無いこと」の2要因が、学生の「老年者は頑固虚弱である」という老年者観に影響するという結果を得た。「頑固虚弱」を構成している項目をみると、「頭がぼける」、「疲れを感じ」、「病気で寝ている」など、加齢や疾病による生活機能の低下の側面を示す項目である。同居経験ありとした学生の祖父母が、同居経験なしとした学生の祖父母と比較し、生活機能の程度に差があったかどうかは本研究では調査しておらず、また同居ゆえに老年者との接触頻度は多いと考えられるが、接触の質についても調査していないため、同居経験の有無がなぜ老年者観に影響するのか、本研究では明らかではない。

一方、松下ら¹⁹⁾によるとスウェーデンの看護学生は日本の看護学生より老年者に対し肯定的な見方を有するとしているが、その理由として、スウェーデンでは3世帯同居は4%（1991）と少ない半面、老年者との接触頻度はむしろ多いと述べている。そしてそれを支えるものとしては、充実した社会保障制度と自立意識の高さゆえに高齢者や心身障害者が自立して地域社会の中で生活していることを指摘している。このことより、自立している老年者に日常的に接し、幼時から良く世話をを受けた経験が学生の肯定的老年者観を形成する要因となることがいえる。

また日・韓・台の大学生の老人に対する態度の比較の研究によると、日本では老年者の「有能性」、「幸福感」というイメージには、「祖父母との会話」が大きく影響しているとされている²⁰⁾。また Haight¹³⁾ は、「53%の学生がもっとも賞賛する高齢者は祖父母」であり、「祖父母は看護学生の肯定的な老年者観形成に影響を与える」とし、Kogan¹⁰⁾ は「より慈しまれた人は老年者に対しより肯定的な見方をもつ」と述べている。本研究も、祖父母との良好な関係が看護学生の肯定的老年者

観に影響を与える要因であるという先行研究を支持する結果であった。

また本研究では、「学生の年齢が若いこと」及び「老年者に対するボランティア経験があること」が、「老年者は社会関係が良好」という老年者観に影響した。本研究で対象となった学生の年齢は20歳～44歳（平均23.6 ± 5.08）と幅があるので、年齢の若い学生にとっては老年者のモデルとなる祖父母の年齢も若く社会交流も活発となり、そのことが「社会関係が良好」という老年者観を強めたとも推測される。また老年者に対するボランティア経験は、学生の老年者に対する接触の機会を多くするものである。老年者の「優れた、有能、高尚、賢い」などの好意的イメージを抱く要因として、「老人との接触が多いこと」と「老人・老人問題への関心が高いこと」が挙げられる^{2,20)}。このことから学生の肯定的老年者観の形成には、学生自らが関心をもって老年者と接触を求めることや、老年者に対するボランティア経験が有効であることを示唆したといえる。

以上より、老年者へのボランティア活動、地域の中での自立した老年者である祖父母や身近な老年者と良好な接触を保ち良い思い出を作ること、また老年者が地域の中で自立して生活できるよう社会的・経済的サポートに深く関心を寄せることが学生の肯定的な老年者観の形成につながるといえる。祖父母や身近な老年者との幼時からの関係を学生自身に改めて振り返らせ、関係性を考察させるような教育介入や、老年者をとりまく社会的環境の理解を促すような教育の有効性が示唆される。

本研究の限界

本研究の対象者は、東京都内の看護学校4校であり、社会人入学生が多く、年齢、入学前職歴、学歴が多様であり、出身地が都内または近郊が多いため、全国の看護学生を代表するとは言い切れない。対象者を拡大し、他の尺度での検証も必要である。

結 論

本研究は馬場らの「老人観スケール」を用いて看護学生の老年者観と学生の生活背景との関連を明らかにすることを試みた。

看護学生の老年者観と学生の生活背景との関連

では、重回帰分析の結果、「祖父母との同居経験が有ること」、「祖父母からよく世話を受けた経験のないこと」の2要因が、「老年者は頑固・虚弱」であるという老年者観に影響し、「学生の年齢が若いこと」、「老年者へのボランティア経験を有すること」の2要因が「老年者は社会関係が良好」という老年者観に影響していた。身近な老年者との幼時からのかかわりを振り返らせる教育介入を行い、看護学生の肯定的老年者観の形成の効果の検証を行っていききたい。

稿を終えるにあたり、本研究にご協力くださいました看護学生の皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 古谷野亘. 老いに対する態度. 柴田博・芳賀博他編著, 老年学入門, 学際的アプローチ, 東京, 川島書店. 1993. p. 177-183.
- 2) 保坂久美子, 袖井孝子. 大学生の老人イメージ-SD法による分析-. 社会老年学 1988; 27: 22-33.
- 3) 中野いく子. 児童の老人イメージ-SD法による測定と要因分析-. 社会老年学 1991; 34: 23-26.
- 4) 古谷野亘, 児玉好信, 安藤孝敏, 浅川達人. 中高年の老人イメージ-SD法による測定-. 老年社会科学 1997; 18 (2) : 147-152.
- 5) 竹田恵子, 大場好子. 中学生の老人イメージとその形成に関連する要因. 川崎医療福祉学会誌 2002; 12 (1) : 161-167.
- 6) 辻正二. 高齢者ラベリングの社会学-老人差別の調査研究-. 東京, 恒星社厚生閣. 2000. p. 171-196.
- 7) 岩淵亜希子, 直井優. 社会観としての「高齢者イメージとその特徴」. 大阪大学大学院人間科学研究科紀要 2003; 29: 69-97.
- 8) 中谷陽明. 児童の老人観-老人観スケールによる測定と要因分析-. 社会老年学 1991; 34: 14-22.
- 9) 馬場純子, 中野いく子, 冷水豊, 中谷陽明. 中学生の老人観-老人観スケールによる測定-. 社会老年学 1993; 38: 3-12.
- 10) Kogan N. Attitudes Toward Old People. The Development of A Scale and an Examination of Correlates. Journal of Abnormal and Social Psychology 1961; 62 (1) : 44-54.
- 11) Lookinland S, Anson K. Perpetuation of ageist attitude among present and future health care personal: implications for elder care. Journal of Advanced Nursing 1995; 21: 47-56.
- 12) Soderhamn O, Lindencrona C. Attitude toward older people among nursing student and registered nurses in Sweden. Nurse Education Today 2001; 21: 225-229.
- 13) Haight B K, Christ M A. Does nursing education promote ageism? Journal of Advanced Nursing 1994; 20: 382-390.
- 14) 瀧断子, 吉尾千世子, 諏訪さゆり. 老年看護学実習前後の老年者に対するイメージの変化. 東京女子医科大学看護学部紀要 1999; 2: 35-43.
- 15) 寺島喜代子, 吉村洋子. 看護学生の老人イメージについて-老人イメージスケールを用いて-. 福井県立大学看護短期大学部論集 1998; 8: 29-37.
- 16) 小川妙子. 看護学生の高齢者へのエイジズム-1年生と3年生のFAQの比較-. 順天堂医療短期大学紀要 2001; 2: 35-45.
- 17) 沖田由美, 中野静子. 看護学生がいだく老人イメージ-老年看護学の講義及び実習前後の変化-. 愛媛県立医療技術短期大学紀要 2001; 14号: 43-48.
- 18) 浅井さおり, 沼本教子, 柴田明日香. 老人看護学学習過程における学生の高齢者イメージ変化の縦断的検討. 日本看護学教育学会誌 2006; 16 (1) : 53-61.
- 19) 松下正子, 森下利子, 川出富貴子. 看護学生の老人イメージ-日本とスウェーデンの比較-. 看護展望 1997; 22 (7) : 90-95.
- 20) 竹田久美子, 細江容子, 袖井孝子, 鄭淑子, 徐炳淑. 日・韓・台大学生の老人に対する態度と老後責任意識に関する研究 (第3報) 大学生の老人イメージ. 日本家政学会誌 1991; 42 (5) : 405-413.